

A Practical Study of Music Appreciation with Active Learning : A Case of School Teacher Training

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 江里 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/475

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



能動的な音楽鑑賞学習の実践的研究

— 教員養成の場合 —

A Practical Study of Music Appreciation with Active Learning

A Case of School Teacher Training

安 藤 江 里

ANDO, Eri

1. はじめに 研究の目的

現行の学習指導要領の方針に基づき各教科において児童や生徒が主体的かつ能動的に学習するアクティブラーニングの手法が実践されている。音楽科の場合、歌唱、器楽、音楽づくりの「表現」領域の学習は演奏したり創る行為が伴い元々活動的であるが、「鑑賞」領域の学習については、楽曲を聴いて感想を書くなど受動的になりがちであった。しかし様々な教育現場での実践的な研究成果により、以前までの受動的な学習から能動的な学習へと変化しつつある。それは教員養成の場でも同様であり、学生自身が主体的かつ能動的に楽曲に関わる経験をする中で授業づくりにおいても実践されていく。

筆者は初等教員養成に必要とされる音楽経験について、まず「聴く力」を挙げている¹⁾。それは、音楽を形づくっている要素を理解し感じる、知覚・感受力を養う経験、および音色や曲想などからイメージを深める音楽的な感受を促す経験のことである。学生自身が様々な楽曲を鑑賞する中で、何を視点として

聴き、どのように能動的に関われば、知覚・感受が結びついて音楽的な感受が深まっていくのかを経験することで、授業づくりについての具体的な指導内容や指導方法が導出されていく。

本研究の目的は、筆者が行った「鑑賞」学習に関わる実践事例と学生の模擬授業の考察を通し、教員養成における鑑賞学習の意義と能動的な鑑賞授業づくりへの可能性を見出すことである。

2. 研究の方法

平成24年度および25年度に行った「初等音楽科教育法」における「鑑賞」学習に関わる実践事例と学生の模擬授業を対象に分析、考察を行う。学生の実態については前述した通りであるが²⁾、事前のアンケートの記述の中にも合唱や合奏などの活動に比べ、「鑑賞」の授業はただ音楽を聴いて感想を書くという受動的で退屈なイメージがあり、もっと楽しく能動的な学習にしていく方法を知りたいという要望もあった。

学生を含め一般的に、日常生活において何

キーワード：能動的な鑑賞学習、教員養成、知覚・感受

Key words : active learning, music appreciation, teacher training, perception and sensibility

らかの音楽を聴くことは恒常的にあり、特に学生は様々なメディアからの音楽情報には敏感に反応し受容している。しかし学校教育における音楽鑑賞学習の意義として、何を目的として楽曲を聴くのか、またどのように楽曲と関わるのか、を明確に示していく必要がある。

小学校および中学校学習指導要領にも示されているように音楽を形づくっている要素とは音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和音の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴づけている要素と、反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組みである。西園はこれらを音楽の形式的側面、そして楽曲の曲想から表現されているものや想像されるものを内容的側面とし、音楽の認識は、音楽の形式的側面の知覚を通しての音楽の内容的側面の感受による、と述べている³⁾。その視点を持って筆者はいくつかの実践を行った。学生の「聴く力」の育成と授業づくりへの実践事例、そして学生の模擬授業を分析、考察していく。

3. 実践内容

(1) 学生の「聴く力」の育成

学生の「聴く力」の育成に当たり、上記の観点から鑑賞学習の指導内容と楽曲教材の選択をした。そして能動的に関わる活動としては、批評文や対話を活用した言語活動、手拍子やステップ、指揮などの動きを伴う身体表現、絵や図形などの描写表現を取り入れ、次の3つの実践を行った。

①「速度」の違いによる知覚・感受

同じ主旋律を持っていても速度の違いを知覚することで表現されている内容の感受も変

わってくることを経験的に学習した。楽曲はオフエンバック「天国と地獄」序曲とサン＝サーンス「動物の謝肉祭」より「カメ」を用い、比較聴取をするが、先入観を持たせなかったため、事前に楽曲名の提示や説明はしなかった。

まず1曲目として「天国と地獄」序曲を聴く。誰もが運動会やカステラのCMでよく耳にする曲である。教室環境が狭いため、曲が始まってすぐ学生にはその場で手や腕を動かして指揮を振る表現を促した。そして音楽を聴き感じたことを書いてもらった。おそらく全員が曲名や本来の楽曲の内容についてはわからなくても、経験的に何度も耳にしたことがあるため、記述内容にもある傾向がみられた。記述内容を形式的側面の知覚と内容的側面の感受に分けて分類する。

〈形式的側面の知覚について〉

- ・シンバルの音が曲を特徴づけている
- ・スタッカートが多い
- ・だんだん楽器が増えて盛り上がる
- ・繰り返しが多い
- ・テンポが速い
- ・金管楽器やトライアングルの音が力強い
- ・強弱がはっきりしている

〈内容的側面の感受について〉

- ・運動会のイメージ
- ・明るい感じ 楽しい感じ
- ・飛び跳ねたり走ったりしたくなる
- ・わくわく、ドキドキする感じ 高揚感
- ・縦に刻むイメージ
- ・せかせか慌ててる感じ 追いかけっこ
- ・元気が出る
- ・笑顔で踊りだしそうなイメージ

2曲目として「かめ」を聴く時も、拍子を

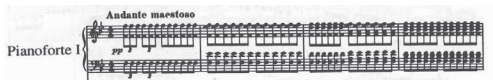
取る行為を促したが、1曲目とは違いゆっくりで弱音であることに戸惑いが見られた。又ほとんどの学生が1曲目のフレンチカンカンの部分の旋律と同じ主旋律を持っていることに気づけなかった。

(譜例1)



このことは筆者にとっても予想外であり、学生に聴く観点をどの程度示すべきか省察が必要である。再度1曲目と2曲目の共通点と相違点に留意して聴くように指示して聴いた。すると、学生の何人かが「あー、同じ旋律なんだー」と気づき、更にもう一度聴いて全員で確認した。この楽曲はあまり知られていないが、全体のテンポ感とピアノの3連符の連なる和声から同じ主旋律を持っても全く違う雰囲気になり、学生も感じ取っている。

(譜例2)



学生の記述を同様に記す。

〈形式的側面の知覚について〉

- ・ピアノの音が連なっている 同じ和音の連続
- ・ピアノの音がだんだん高くなる
- ・3連符のきざみが印象的
- ・ゆっくりなテンポ リズムが取りにくい
- ・弦楽器の旋律は低音で、伴奏のピアノが高音
- ・強弱がずっとP
- ・和音が複雑 短調

〈内容的側面の感受について〉

- ・ゆったりした感じ 穏やか 落ち着く
- ・暗い 不安 悲しいイメージ
- ・滑らか 流れるようなイメージ

- ・単調で眠くなる
- ・優しい感じ そよ風が吹いてるイメージ
- ・海の中 雪の中 森の中 自然の静けさ
- ・終わり方が消えていく感じ

ほとんどの学生は音楽を聴いた印象やイメージした内容を感想として記述しているが、その根拠となる音楽の形式的側面について記述している学生は半数以下であった。授業では記述内容を発表してもらいながら、形式的側面の知覚と内容的側面の感受を結びつけて整理し共有していく必要がある。また時間があれば対話しながら一つ一つ楽曲を聴き直したり楽譜ではどうなっているのかを確認しながら進めるのも有効であろう。直感も大事だが、ただ感想を書くのではなく、音楽を形づくっている要素に注目して聴き取り、知覚・感受力を高めていくことが重要である。しかしながら、聴く回数を重ねるごとに速度の違いだけではなく、使われている楽器の音色、強弱、テクスチュアの違いにも気づいていき、学生の「聴く力」は経験次第で大いに育つと確信した。そして学生の感性は思った以上に豊かなものであり、特に内容的な記述には豊かな想像力を感じた。

②音の重なりを聴いて描写表現

次にサン＝サーンス「動物の謝肉祭」より「水族館」を取り上げ、旋律と絡み合う和声を含む音の重なり、いわゆるテクスチュアから知覚・感受したことを図形で描写表現する実践を行った。

図形楽譜に関する先行研究もいくつかあるが、小中学校での実践例として、12色の色紙を用いて丸や三角、楕円というような抽象的な形を基本としているものがある⁴⁾。図形楽

譜に表現されるのは、音楽の諸要素を知覚し、その諸要素が生み出す質や雰囲気を感じたものである。コミュニケーションによって思考が発展するためグループ活動が有効であることも示されている。

今回、教員養成の学生を対象にした本実践では、色鉛筆を使い個人活動として描いてもらった。具体的なイメージ（魚が泳いでる様子など）を形にするのではなく、音楽の諸要素が生み出す質的なもの（～な感じ）を線や形、色で抽象的に描くように指示した。まずは一度聴き、主旋律を確認した。

（譜例 3）

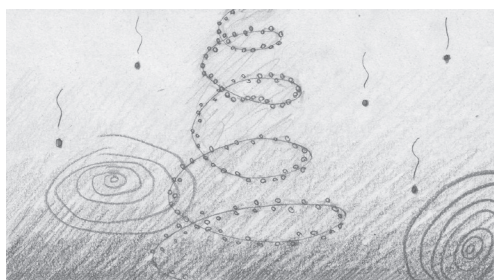
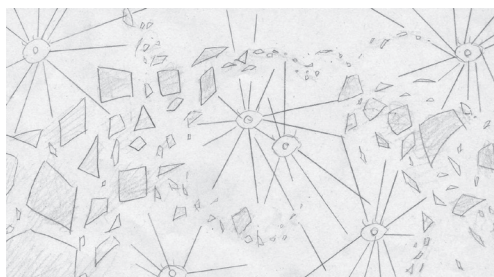
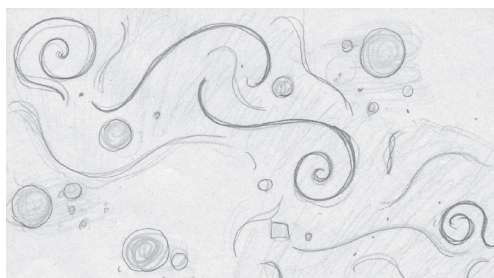
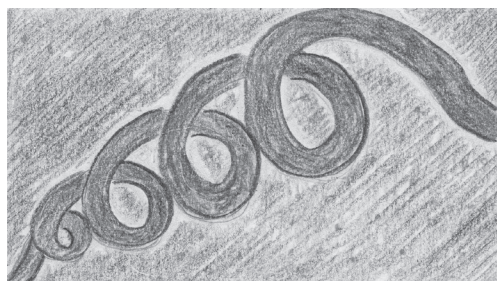


次に旋律以外の音の動きについて注目して再度聴く。学生にとっても楽曲全体からある部分を抜き取った聴き方をするのは難しいことであろう。旋律とその他の部分を何度か聴くにつれ聴き取れるようになっていった。

（譜例 4）



以下に学生が描いたものの一例を示す。



特に楽曲名を示さなかったが、描かれた図形を見ると、旋律の半音階的な動きが滑らかな曲線となり螺旋状の渦巻きの形で表現している学生が多い。そしてくるくる回ったりふわふわ浮いている感じや漂っている感じを表現している。旋律以外の部分のアルペジオの細かい音の動きは主旋律の背景となって複雑に絡み合っているようだ。他にもしずくのような形やキラキラ光っているような形もある。更に色使いについては比較的柔らかなパステル系を何色もつかい繊細なニュアンスを出している。

筆者が想像していたよりも学生は楽曲をじっくり聴き黙々と描写している姿が印象的であり、完成度も高かった。言葉による表現

だけでなくこの図形描写によって質的な意味を十分に読み取ることができた。表現手段は様々であるが取り組む姿勢から、学生にとってはこの図形描写も能動的に関わる活動として大いに有効であることが分かった。ただし、この質的内容について更に対話することで、他者と共有し更に思考を深めることが可能と思われる。

③比較聴取による音楽的な感受の深まり⁵⁾

最後に学生の音楽的な感受を更に深めることを目的として「ふるさと」をテーマに比較聴取を行った。教材は6年生の歌唱共通教材である文部省唱歌「ふるさと」(高野辰之作詞 岡野貞一作曲)を扱った上で、同じ楽曲を東儀秀樹による箏楽の演奏で比較聴取する。更に平成25年度NHK合唱コンクールで小学校の課題曲「ふるさと」(小山薫堂作詞 youth case作曲 桜田直子編曲)を比較聴取する。

比較聴取に関する先行研究からも、条件統制によって聴く観点を与えることで知覚・感受が促進されることについて、様々な実践例が提示されその有効性が検証されている⁶⁾。本実践における比較聴取は楽曲のテーマを「ふるさと」とし、形式的側面の知覚と内容的側面の感受に加え文化的側面も関わってくる。同じ旋律でも歌唱と器楽の音色とでは雰囲気や全く違うし、同じテーマでも時代や歌詞の内容、楽曲の構成によって違ってくる。又、学生にとって「ふるさと」に対する思いは自らの境遇と重なる部分があり、自分自身の経験や感情と結びつけやすく感受が深まるのではないだろうか。楽曲に対するイメージを自由に記述してもらった。内容を次に示す。

表1 各楽曲に対するイメージ

①文部省唱歌 「ふるさと」 高野辰之作詞 岡野貞一作曲	②東儀秀樹の箏 楽による「ふる さと」	③「ふるさと」 小山薫堂作詞 youth case作曲 桜田直子編曲
明治・大正の古いイメージ 時間がゆっくり流れている 夕暮れ 秋	飛鳥時代 朝鮮時代の王宮 夕暮れ	現代的 小学校時代
自然豊かな田舎 山 川 森 子どもが元気よくあそんでいる 仲良く暮らしている人々 暖かい両親とご飯が待っている 木造の小屋	奈良 京都 東アジア中国 モンゴルの高い 崖の上から 草原で眠っている 雄大な自然 生物全体	具体的な場所というより心の居場所としてのイメージ 都会も含めてそれぞれの帰る場所としてのふるさと 自分の原点としてのふるさと
なつかしい 昔はよかったな 穏やかな気持ち あたたかくやわらかい感じ 親に会えないさみしさ	悲しくなる 哀愁 おしゃれな感じ 大きな存在に包まれたい 暗くないが重厚 力強く壮大な ゆらゆら舞っている	元気がでる 前向きになれる 涙を誘う優しい 気持ち 時に辛くなる 人とのつながりを大切にしたい みんなつながっている
両親や友への思い 夢をかなえようと頑張りつつも 親に会えないさみしさ いつか帰りたい ゆっくりとした 一定のリズムが 落ち着いた雰囲気を出している	優しい音色 雅楽 歌詞が無い分じんわりと故郷について考えられる 楽器の音色が長く続く感じなので広大な景色を思い浮かべる	きれいな 純粋 歌詞が美しすぎる 理想的 キラキラした言葉の世界 未来に向けての応援ソング 小学生の歌声にとってもよく合う 現代の合唱曲 細かい音符と広い音域で難しそうだが、子どもにはなじみやすい

文部省唱歌「ふるさと」については、学生のほとんどが、子どもの時からよく耳にしている親しみのある楽曲であるが、改めて3番の歌詞までじっくり歌い味わい、旋律の特徴や歌詞の意味を捉え直していた。記述内容にあるように、主に歌詞の内容から古い時代のイメージだが作詞者が描いた故郷の風景がイメージしやすく、感情も懐かしさ、両親や友への思いなどに共感している学生が多い。自

分自身の境遇と重ねた大学生だからこその思いが出てくるのではないかと思う。

箏箏による「ふるさと」は同じ旋律であるが、箏箏の楽器の独特な音色の響きやゆっくりとしたテンポ感からより壮大な世界観をイメージする学生が多かった。歌詞が無い分純粹に楽曲と向き合うことで、自由なイメージが生まれることがわかった。また感情としてよりものの悲しさを感じる学生が多かったのは、箏箏の楽器が持つ独特の揺らぎだろうか。箏箏は雅楽で用いられる楽器だが、なかなか触れる機会がないため、新鮮でありじっくり聴き入る学生の姿は何か心に訴えるものがあると思われた。他の楽器でも比較してみると面白いだろう。

合唱曲「ふるさと」は歌詞のついた旋律譜を見ながら鑑賞した。やはり歌詞の内容から、故郷はそれぞれ育った場所が違っても心の拠り所としてのイメージを持つ学生が多く、人々とのつながりを大切にしながら進もうとする歌詞に共感する学生が多かった。旋律に関しては文部省唱歌に比べるとかなり音域も広く音価も細かいので難しいと思われるが、楽曲全体のイメージはより現代的で受け入れやすいと思われた。

最後に3曲を比較聴取しながら自分自身の「ふるさと」のイメージと結びつけて考えることで、大学生なりの思いが音楽と共感できた部分はあったと思う。楽曲の自分自身への働きかけは様々であり、人によってそれまでの経験や境遇によって異なる。従って感じ方は人それぞれであるが、様々な思いを共有する経験が今後に生かされると考える。

能動的な鑑賞学習として、言語活動、身体活動、描写表現を取り入れながら、学生の「聴く力」の育成として、形式的側面の知覚と内

容的側面の感受を促し、文化的側面の理解も含め音楽的な感受を深めることは非常に意義深く、必要な音楽経験となろう。

(2) 授業づくりへの学び

学生自身の「聴く力」を育成すると共に、学習指導要領の各学年の目標や指導内容を把握し、具体的な「鑑賞」の指導実践例を示し模倣的に経験することで授業づくりへの学びへ導いていく。「鑑賞」の基本的な指導内容や能動的な関わり方は「聴く力」の育成と同じ方針である。ただし子どもの発達段階や興味関心を考慮しながら、また歌唱や器楽、音楽づくりの「表現」領域との関連も視野に入れて楽曲教材や活動内容を決めて授業を構成していく必要がある。

以下に筆者が提示した実践例を示す。

①低学年の指導実践例

「小学校学習指導要領解説 音楽編」によれば、低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り（中略）特に第1学年においては幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること、とある⁷⁾。この時期の発達の特性としては、生活における身の回りのあらゆるものに体ごとに関わり、生活体験と感情が密接に結びついていることである。また音楽科全般としても音楽を体全体で感じることの重要性と共に、体を動かす活動を取り入れることがうたわれ、特に低学年は音楽に合わせて自然に体を動かすことを喜ぶ傾向にある。そして、具体的な「鑑賞」の学習で取り上げる内容の教材選択の観点項目として、我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊りの音楽など身体反応の快さを感じ取りやすい音楽、日常の生活に関

連して情景を思い浮かべやすい楽曲、とあり⁸⁾、幼児期からの表現遊び、身体活動、身近な生活に関連した教材が重要になってくる。

幼少接続の問題は様々な研究がされており改めて講じたい。いずれにせよ、特に低学年の指導は教師が幼児期からの発達の特性を踏まえて行う必要がある。また特に低学年は音楽科専科だけではなくクラス担任が音楽の授業を行うことが多いため、教員養成においても重点的に扱う必要がある。

そこで筆者は低学年では「鑑賞」の学習に限定せず、常時活動の実践として教室で音楽を流すことを提案している。例えば、「さんぽ」「ミッキーマウスマーチ」などは幼児期からすでに親しんでいる楽曲であり、自然と歩きたくなったり踊りたくなる。音楽に合わせて歩くだけでも子どもは心地よさを感じ友達とのコミュニケーションが生まれる。そしてテンポの速い曲（例えば「天国と地獄」）、遅い曲（例えば「かめ」）などで変化をつけると、走ったりのそのそゆっくり歩いたり、体全体で音楽のテンポ感を体感する。そこから新たなイメージがわく可能性もある。

このような常時活動があると、「鑑賞」の授業もスムーズに導入できるのではないだろうか。筆者はこの前提に立ち、学生に対し模擬的に実践例を示した。

まず、ムソルグスキー作曲 ラヴェル編曲「展覧会の絵」より「卵の殻をつけたひな鳥の踊り」を取り上げた。曲名などは告げずに楽曲を聴いて思うままに子どもになったつもりで自由に動いてもらう。この曲は踊りだしたくなる要素が含まれており、様々なイメージが浮かぶ。音が跳ねる感じ、色々な楽器の音色などから、小鳥が追いかけっこしている様子、ひよこのダンス、泡がはじける感じな

どを身体表現していく。それらを発表しながら共感していくことで楽曲の雰囲気を感じ取り楽しい活動ができる。

他にアンダーソン作曲「シンコペーテッド・クロック」では、ウッドブロックの音色に気づき、時計のようにカチコチ歩いたり、変わったリズムに反応する。又中間部のトライアングルの音に目覚まし時計がなるイメージを持って身体表現してみる。（譜例5）



同じくアンダーソン作曲「踊る子ねこ」ではグリッサンドの音の動きや3拍子に乗って猫になりきってダンスする。子どもの生活にある身近なものを題材としたわかりやすい楽曲が好ましい。特に低学年の子どもにとって動物や乗り物はイメージを持って身体活動につながりやすい。

②中学年の指導実践例

中学年になると知的側面の成長に伴って理解力が増し、基礎的な音楽表現の能力や鑑賞の能力も高まる。低学年で身に付けた能力を基に、特に「鑑賞」学習においては、曲想の変化に気づき楽曲構造に注目して聴くことが求められている。また能動的な活動として、低学年と同様に感じたことや想像したことを、言葉や体の動き、絵、音で表現し相手に伝えることが有効である。

そうしたことを踏まえ、指導実践例としてまず、グリーグ作曲「ペール・ギュント第一組曲」より「山の魔王の宮殿にて」を取り上げた。まず学生には一度全体を聴いた段階で楽曲全体の雰囲気や感じた事や想像した事を

書いて発表してもらった。

- ・ネコがいたずらをして忍び足をしているが、見つかって急いで逃げていく様子
- ・夜、遠くから少しずつ兵隊がやって来て、街がパニックになり一番偉い人が制圧する
- ・暗い洞窟の中を恐る恐る進み、だんだん早足になって何か得体のしれぬ怪物に出会って大慌てで逃げる

学生それぞれが豊かな想像力で楽曲全体の雰囲気をつ捉えている。次に、再度聴く時には音楽を特徴づけている要素や仕組みに注意しながら楽曲の特徴をつ捉えて記述してもらった。主旋律及び共通事項にもなっている音楽を特徴づけている要素（音色、リズム、速度、など）と音楽の仕組み（反復、変化など）をキーワードとして確認し、その形式的側面の知覚を通して内容的側面の感受と結びついていることを整理していった。（譜例6）



- ・同じ旋律が繰り返されている（反復）⇒一つのストーリー性が出る 主人公のテーマ
- ・音色（楽器構成、奏法）音の高さ（調）速さ（だんだん早くなる）強弱（だんだん強くなる）などの変化⇒だんだん迫ってくる感じ 緊張感が高まる感じ どんどん増える感じ
- ・低音の動き⇒不気味 静けさ 怪しさ 夜
- ・弱音とピッチカート奏法⇒ひそひそ感 忍び足
- ・旋律の半音階的な動きとリズム⇒ミステリーな感じだが、ちょっと滑稽さがある。いたずらめ 泥棒 まぬけな感じ 不安定な感じ

- ・最後の間からの流れ⇒パニック 一挙に逃げる感じ 一瞬息が止まる感じ

授業の中で、それぞれの音楽を特徴づけている要素や音楽の仕組みがこうなっているから、こんな感じがする、というような表現ができるように促すことを学習した。また子どもがうまく表現できない場合、教師は様々な子どもからの考えを結び付けたり、対話を促したりする必要がある。学生も模擬的に経験したことで、自分には思いつかなかった点に気づき、新たな発見もあったようだ。

今回は発言による言語活動が中心になったが、学生には同じ題材を扱って楽曲の変化の様子を図形で可視化し、身体表現しながら実践している授業のビデオを見せるなど、様々な手法の可能性を提示した⁹⁾。

更に、「表現」領域の歌唱と「鑑賞」を関連付けた指導実践例として小学校4年生の教科書から「パレードホッホー」（高木あき作詞 平吉毅州作曲）とビゼー作曲「アルルの女」第2組曲より「ファランドール」を取り上げ、旋律の重なりを指導内容とした小学校現場での実践をビデオで紹介した。これらの楽曲は特徴の異なる二つの旋律の掛け合いと重なりによって構成されており、それぞれの雰囲気や特徴の違いを学ぶにはとても有効な教材である。子どもたちからは実際にどんな発言が出てくるのか、身体表現として子どもはどんな動きをするのかを観察した。

A・・・行進している感じ 弾む感じ

B・・・柔かい感じ マシュマロ 流れる感じ

「パレードホッホー」の歌唱表現ではAとBの自分が好きなパートを選び二つに分かれて実際に歌いながら自由に動き特徴をつ捉えていた。「ファランドール」の鑑賞でも「王の行進」と「馬のダンス」の旋律の特徴をつ捉え

二つに分かれて身体表現を取り入れながら感じ取っていた。実際、子どもたちの反応に対する教師の対応はどうかなど、授業実践につながる学びであった。

③高学年の指導実践例

高学年になると更に論理的な思考が高まり、身体の成長とともに社会性も発達する。従って響きのある声で歌ったり、合唱や合奏などを通してアンサンブルの楽しさを味わったり音楽の美しさをより深く感じ取ることができる。「鑑賞」の学習においても中学年に引き続き、楽曲の特徴を見通しを持って聴くことができ、演奏の良さを理解することが求められている。そして批評文や紹介文を書いたり、体の動き、絵、造形、音などで表現し伝え合うことで学習が深まっていくと思われる。

高学年の楽曲教材を選択するにあたり、諸外国の文化や舞台芸術としての観点からラヴェル作曲「ボレロ」を挙げた。事前にオーケストラの編成や弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器それぞれの楽器名や音色の違い、奏法によって醸し出される特徴にも触れ、楽曲全体を聴いた。学生も子ども達も耳にしたことがある楽曲で、楽曲を特徴づけている一貫したリズムパターンと二つの主旋律が変化しながら何度も繰り返され、次第に盛り上がっていく。(譜例7)



この曲はバレエのための舞曲であり、筆者が所有していたビデオ映像でも鑑賞した。ボレロは様々な演出で上演されており、楽曲の特徴と身体で表現されている芸術性に対する

美的情操にも触れた。時間の関係で鑑賞するだけになってしまったが、繰り返されるリズムパターンを活用した音楽づくりへの展開や身体表現の活動の可能性を示した。本来であれば、舞台芸術として我が国の伝統文化として歌舞伎や能、雅楽などとの対比も興味深い学習となろう。

最後に、実際小学校の現場でもよく扱われているホルスト作曲「管弦楽組曲 惑星」から「木星」を取り上げた。楽曲の一部は器楽合奏でもよく扱われ、学生も事前によりコーダーと鍵盤楽器、簡易リズム楽器による合奏をしてから、オーケストラによる全曲演奏を鑑賞した。よく聴く合奏部分は比較的単純な楽器構成であるが親しみやすい旋律と重厚な和声の響きを味わうことができた。(譜例8)



しかし、原曲を聴くと、聴いたことのない部分があったり、複雑なリズム、拍子やテンポの変化、様々な楽器構成によって色彩豊かな楽曲であった。「木星」へのイメージがより深まった経験である。このように自分たちが経験した歌唱や器楽合奏、音楽づくりなどの「表現」領域の活動と関連づけた「鑑賞」の授業はより興味関心を引き出し、主体的かつ能動的に楽曲に取り組み理解を深めることになる。また自分たちの演奏と聴き比べることでそれぞれの演奏の良さを探求することにもつながる。

以上、授業づくりへの学びとして、学年別に指導例を提示し模擬的に経験したことで、様々な指導法や展開例を学んだ。

(3) 学生の「鑑賞」模擬授業の分析

平成24年度25年度の「初等音楽科教育法」の講義では、指導実践例の模擬の経験をした後、グループ活動として学生が指導案を作成し、模擬授業を行った。実際の模擬授業は各グループ20分程度のため、主な活動部分に限定されたが様々な指導内容や活動が提示され、有意義な模擬授業となった。「鑑賞」領域の指導案を立てたのは3グループあり¹⁰⁾、それぞれの指導案と模擬授業の実践を分析し考察する。

①題材名「曲想を感じ取り、合奏しよう」

題材の目標・・・曲想を感じ取り、それを生かした表現を工夫し、思いや意図を持って演奏する。

対象学年・・・6 学年

楽曲教材・・・ホルスト「管弦楽組曲 惑星」から「木星」「火星」

本時の展開（全7時間中1時間目）・・・

ホルストについて写真を提示し「惑星」の作曲者であることを紹介する。

比較聴取として曲名を告げずに「火星」「木星」の順に聴いて想像したことや感じ取ったことを記入し発表する。学生の示したワークシートは以下の通りである。

かんしょうノート		月 日 名前
曲名	作曲者	
想像したことや感じたこと		
曲名	作曲者	
想像したことや感じたこと		

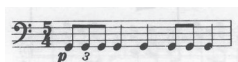
「火星」のイメージ	「木星」のイメージ
・ 戦っているような	・ 壮大な感じ
・ ドキドキする	・ きれいな音色
・ かっこいい	・ 癒される感じ
・ 強い	など

最後に曲名とそれぞれの惑星の写真を提示し、イメージを共有する。

今後「木星」の合奏に取り組むにあたり感じ取ったことを生かして表現の工夫をすることを告げる。

この模擬授業は「木星」の合奏への導入的な位置づけで、鑑賞の授業として設定している。写真を提示したことでよりイメージが鮮明になった。また比較対象として「火星」を取り上げたのは、曲想が対象的でわかりやすかった。

課題として、楽曲から雰囲気を感じ取りイメージすることはできるのだが、なぜそう思うのか、すなわち音楽を特徴づけている要素や仕組みから導き出すような言葉がけが必要となってくる。「火星」は何といっても4分の5拍子の独特なリズムである（譜例9）。



子ども達が気づかない場合も想定して、特徴的なリズムに気づかせるような取り上げ方の工夫を含めて教材研究しておく必要がある。

ワークシートも、想像したことや感想だけでなく、音楽を形づくっている要素を聴きとって記入できるよう工夫が必要である。6年生の場合、曲想から感じ取ったことを生かして思いや意図をもって表現を工夫するために、全体のイメージだけでなく楽曲の構造や音色、フレーズ感など具体的な中身に言及し

ながら追求していく指導力も必要である。

②題材名「世界の音楽を聴いて曲名をつけよう」
題材の目標・・・各国の伝統的な音楽や楽器を用いた演奏を聴き、特徴に合った曲名をつけることができる。

対象学年・・・第5学年

楽曲教材・・・「カイマナ・ヒラ」（ハワイ）

「The green hills of Tirol」（スコットランド）

「繁盛節」（沖縄）

「情熱のフラメンコ」（スペイン）

本時の展開（全1時間）・・・鑑賞する楽曲の演奏者の写真を貼り、どんな楽器や衣装で演奏するのか示す。

- 1 バグパイプ
- 2 ギター フラメンコ
- 3 三線
- 4 ウクレレ

ワークシートにある世界地図に結び付けてどの地域の音楽なのかを予想させる。

世界の音楽をきいて曲名をつけてみよう！

ワークシート

名前		
何曲の演奏の曲かな？	曲名をつけてみよう！	曲を聞いた感想をきいてみよう！ （どんな様子があったかな？）
1		
2		
3		
4		



順不同に4曲鑑賞しながら、写真と突き合わせつつワークシートに感想や曲名をつけて記入する。どのような曲名をつけたのか理由と

ともに発表し合い、最後に正式な曲名と解説をする。

この模擬授業は、高学年における我が国や諸外国の音楽や文化に視野を広げ、音楽の文化的側面の理解を促すものであり、特に導入で楽器や衣装を見せながらそれぞれの地域を地図上で確認するなど、どんな音楽が流れるのか興味関心を持たせていた。実際は楽曲の特徴的な部分を聴かせていてわかりやすかったが、曲名を付けてみるというのは少々難しかったかもしれない。しかし発表し合う中で楽曲の特徴や楽器、衣装などが手掛かりになって共有できる。社会科や総合の時間など合科的な展開の可能性もあり、子ども達の学習状況によっては非常に有効な題材であろう。1時間で終わらせずにもう少し深めていきたい。なぜその地域でそのような楽器や音楽が生まれたのか、また動きを伴う音楽であれば楽曲を身体で表現することも可能である。楽器の音色によって醸し出される雰囲気や感情の違いを言語活動によって共有し、文化的側面の理解と国際理解につなげたい。

③題材名「いろいろな行進曲を聴いてみよう」
題材の目標・・・各行進曲の違いを聴き取って曲の雰囲気や場面の変化を想像できる。自分の中のイメージを体で表現すること、友だちと共有し合うことの楽しさを味わう。

対象学年・・・第3学年

楽曲教材・・・「トルコ行進曲」（モーツァルト）

「ラデッキー行進曲」（ヨハン・シュトラウス）

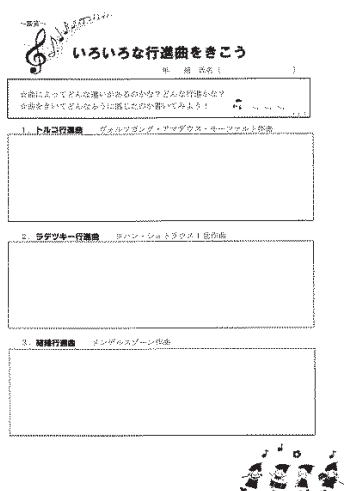
「結婚行進曲」（メンデルスゾーン）

本時の展開（全2時間中1時間目）・・・子ども達に「鑑賞」とは何かについて話し、本時は行進曲を3曲聴いてみることを告げる。

まず冒頭部だけを聴かせて曲名を告げ、聴

いたことがあると興味を引き付けてから全体を流す。ワークシートを配り、それぞれの楽曲のイメージやどんな場面で流れるかなど、感想を書く。また聴きながら身振りで表現し、友だちと共有し合う。

記述した内容を発表し合い、行進曲の違いを楽しみながら味わう。



この模擬授業は「行進曲」をテーマにした比較聴取によって、様々な行進曲があること、楽曲の特徴や演奏の良さに気づき、聴き比べの楽しさを味わっている。3年生という発達段階において、「鑑賞」という言葉の説明とじっくり聴く体験をさせることに留意していた。子どもにも馴染みのある楽曲を選び、強弱や速さの変化がわかりやすく、自然と手や腕を動かしたくなる設定であった。それぞれの楽曲のイメージを更に深め、どんな場面を想像するかによって今後の身体表現も楽しくなりそうだ。

以上、これらは学生対象の模擬授業のため比較的スムーズに行えたが、実際は児童の反応や学習ペースなどに臨機応変に対応していく必要がある。しかしながらこの模擬授業の

実践は「鑑賞」の授業が受動的なものにならず、子どもが主体的、能動的に関わる活動を通して、基礎的な鑑賞の能力を身に付けるための、様々な指導内容と指導方法を経験的に学ぶことができ、お互いが評価し合うことで今後の授業づくりへ生かすために非常に有意義なものであった。

4. まとめと今後の課題

(1) 教員養成における鑑賞学習の意義

初等教員養成では、学生自身の音楽経験が十分ではないため、音楽の基礎知識や演奏技能の習得と共に、「聴く力」の育成が重要である。筆者は特に「聴く力」はすべての音楽活動の根底になっていると考える。人間の発達に音楽の存在が欠かせないのは、音や音楽を「聴く」ことに始まり基礎的な能力と感性が育ち、更に表現活動へと広がっていき、心と身体の成長のバランスが取れていく。その基礎を作る「聴く力」の育成ための実践は普段何となく聴いているのとは違い、目的を持って聴き取りイメージを深め他者と共有する学習であり、教員を目指す学生自身の知性と感性の調和のとれた人間を育てるものである。

実践から得られたことは、学生が楽曲の特徴や雰囲気、イメージなどを想像以上に豊かな感性で捉えていることであった。しかしながら、楽曲を特徴づけている要素や仕組みの知覚と内容的な感受を結び付けて表現する経験が少ないことも分かった。その経験を経ることが「鑑賞」学習の意義でもあり、その視点を持つことで授業づくりへの学びにもつながる。

(2) 能動的な鑑賞授業づくりへの可能性

学習指導要領にもあるように、言語活動の

充実によって、受動的になりがちであった鑑賞の活動を能動的で創造的な活動に改善することが意図されている。また、言語活動だけでなく、身体反応や体を動かす活動、絵や造形などで表現する活動にも触れている。

今回の実践においても言語活動、身体表現、描写表現を取り入れ、学生が能動的に関わる活動ができるよう配慮した。

言語活動は紹介文や批評文、ワークシートへの記入、そして発表し合い対話することで深まっていく活動である。学生は熱心に記入していたが、時間の関係で対話しながら深める活動ができなかった。またワークシートの作り方によっても興味関心を引き付けることができ、更に学習の意図をわかりやすく整理できる。また文章表現や発言が苦手な子どもへの対処も含めて他教科との連携を図りながらより有効な方法を探っていきたい。

絵や図形による描写表現は初めての試みであったが、学生は非常に意欲的であった。楽曲からのイメージを抽象化し自分なりの色と形で表現する活動は新鮮であり、普段の姿からは想像できない学生の感性にも触れられた。図形楽譜を含め、実際授業の中でどう扱うかは、様々な方法が考えられるが、能動的に関わる活動としては十分可能性がある。

ただし、文章表現と同様に描写表現にも得意、不得意な学生がいるだろう。経験することは大事だが、子どもによっては苦手意識のある場合、主体的、能動的な活動となるかは検討の余地が残る。

身体表現については能動的な活動として音楽科全体として積極的に取り入れていく有効な手段と考える。「鑑賞」学習においても、楽曲から感じ取ったことを身振りだけでなく、体全体で表現できる。今回は教室環境からな

かなか実践できなかったが、広いスペースがあれば、もっと活発に活動でき、子どもも楽しく自由に表現できる。実際小学校で実践しているビデオを見て、様々な可能性を感じた。

その他、「鑑賞」の授業を単独で行うことに限定せず、「表現」領域と関連付けることも能動的、創造的な学習に展開できる可能性を持つ。

(3) 今後の課題

筆者の「鑑賞」学習にかかわる実践事例と学生の模擬授業の考察を通し、いくつかの課題を感じた。

まず楽曲を聴かせる際の指示をどこまで言及するかについてである。それによって聴く観点が変わってくるため、教師の予測と学生の反応が違ってくことも想定し、目的と指導内容によって検討する必要がある。更にワークシートの作り方にも工夫が必要である。筆者の実践も不十分な点があったため、学生への指導を含めて再考したい。

次に、楽譜の取り扱いをどうするかについてである。教員養成として、聴いた印象だけでよいのだろうか。楽曲を特徴づけている要素や仕組みを楽譜で確認することも大きな学びとなるが、学生の楽譜に関する知識や読譜力も不十分なため、今回は扱わなかった。できれば、歌唱や器楽などの「表現」領域の学習と合わせて「鑑賞」領域でも音の強弱やスラー、スタッカート、特徴的なリズムパターンなど、楽譜からどんな音楽かを読み取る力も併せて育成できないか今後、実践研究を行いたい。

更に伝統音楽の取り扱いについてである。今回は西洋音楽が中心となり、和楽器としては「ふるさと」を箏の音色で演奏したもの

を扱ったのみであった。現代の生活において我が国の雅楽や歌舞伎などの伝統文化、また民謡などの郷土の音楽に触れる機会は多くはないため、鑑賞の授業を通して学習することは大変有意義である。また学生の模擬授業にあった諸外国の文化の理解のためにも我が国の伝統文化について学ぶことは大切である。非常に専門的になると難しいが、先行研究も様々に行われているので「表現」領域との関連も含めて、身近なところから教材研究を行い実践していきたい。

最後に教員養成として、実習だけでなく常に小学校現場との連携した実践研究が欠かせないことも付け加えたい。

注

- 1) 安藤江里「初等教員養成に必要とされる音楽経験に関する一考察～模擬授業の有効性～」川口短大紀要第29号 p189 (2015)
- 2) 同上p190-191
- 3) 西園芳信「小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究」風間書房 (2005) ここでは音楽科の指導内容を①音楽の形式的側面 ②音楽の内容的側面 ③音楽の文化的側面 ④音楽の技能的側面として挙げている
- 4) 小島律子編著「子供が活動する新しい鑑賞授業 音楽を聴いて図形で表現してみよう」音楽之友社 (2011)
- 5) 安藤江里「比較聴取によってイメージを深める鑑賞の授業構成～教員養成における『ふるさと』の実践から～」学校音楽教育研究Vol.20 p140-141 日本学校音楽教育実践学会紀要 (2016)
- 6) 衛藤晶子・小島律子「音楽授業において知覚・感受を育てる方法論としての比較聴取～表現の授業の場合～」大阪教育大学紀要 第54巻第2号 p29-44 (2006)
- 7) 文部科学省「学習指導要領解説 音楽編」 p69

教育芸術社 (2008)

8) 同上p32

9) 日本学校音楽教育実践学会編DVD「生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム 幼稚園から高等学校まで」(2011)

10) 安藤江里「初等教員養成に必要とされる音楽経験に関する一考察～模擬授業の有効性～」川口短大紀要第29号 (2015)

参考文献

- 文部科学省「学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社 (2008)
- 日本学校音楽教育実践学会編「生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム 幼稚園から高等学校まで」東京書籍 (2011)
- 西園芳信「小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究」風間書房 (2005)
- 高倉弘光「〔共通事項〕が見える 子どもがとぎめく音楽授業づくり」東洋館出版社 (2012)
- 今 由佳里「音楽鑑賞教育に関する基礎的研究」鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 65 p49-54 (2014)
- 宮下俊也「音楽鑑賞学習における批評の構造と思考過程の検討」学校音楽教育研究Vol.14 p251-262日本学校音楽教育実践学会紀要 (2010)
- 橘田美喜恵「音楽科における言語活動の充実をめざした学習指導の研究～聴き取る力や感じる力を育てる小学校鑑賞領域の授業づくりを通して～」山梨県総合教育センター (2008)
- 衛藤晶子「『音楽的な感受』を育てるために身体表現を組み入れた授業構成～『音楽的な感受』から「鑑賞の能力」への発展過程に注目して～」学校音楽教育研究Vol.11 p140-141日本学校音楽教育実践学会紀要 (2007)
- 小原光一ほか12名「小学生の音楽」1～6 教育芸術社 (2012)
- 音楽テーマ事典 第一巻 第三巻 音楽之友社 (1983)
- zen-on score サン＝サーンス 組曲「動物の謝肉祭」全音楽譜出版社